東京経済大学報

2018 年度　第 51 巻　4 月臨時号

2018 年度入学式挙行

コラム

- ■教員リレーコラム　私の★研究
- ■職員リレーコラム　私の★シゴト
- ■学生コラム・留学生コラム　ほか

CLOSE UP

- ■各分野で活躍した学生を表彰する「ＴＫＵ進一層賞」

2018年度 入学式挙行!!

総勢1732名の新入生(編入学・学士入学・大学院等を含む)を迎え、2018年4月1日付けで学長に就任した岡本英男経済学部教授が、学長として初めての入学式に臨みました。

学長
岡本　英男
(おかもと　ひでお)

【学長メッセージ】

東京経済大学に入学された皆さん、おめでとうございます。

皆さんは、今日から自由な学問研究を尊重してきた「自由の学府」東京経済大学で学ぶことになります。確かな知識を身につけ学問の基礎を学ぶうえで正課の授業が大切なことは言うまでもありませんが、皆さんの行動力、協調性と柔軟性、忍耐力と責任感を養ううえで課外活動がたいへん有効です。クラブ、サークルそしてゼミやクラスで友人をつくり、いろいろなことを語り合ってください。

友人との語らいを楽しむ一方で、本もまた皆さんのかけがえのない友人になります。大学ではぜひ読書の習慣を身につけてください。読書もまた「友との語らい」と同様に皆さんの人間的広がりと心の豊かさをつくります。そして何もよりも皆さんを真の意味で「自由な人間」にします。

皆さんは今日から私たちの仲間です。先輩たちの行動、それを支えた「東経大スピリット」を絶えず想起しながら、東京経済大学の新しい伝統を一緒につくっていきましょう。

(2018 年度入学式式辞より抜粋　全文は本学 HP に掲載しています)

2018年度 大学役職者から新入生へのメッセージ

副 学 長
竹内　秀一
(たけうち　ひでかず)

4年間＝1,461日＝35,064時間。「時は金なり」ですので, この時間を有効に利活用してください。大学での4年間は長いようで短く感じられると思います。
充実した4年間となることを祈念いたします。

副 学 長
岸　志津江
(きし　しずえ)

モノやお金は使えばなくなりますが、頭は使うほどよくなります。4年間の学びを通して信頼できる情報を見極める知性と、社会や企業の課題を解決する能力、AIにはない創造性と心の豊かさを身につけて、一生の財産にしましょう。

経済学部長
南原　真
(なんばら　まこと)

皆さんが是非充実した日々をすごせるよう願っています。大学では部活やサークル、2年次からはゼミに入り友達を作りましょう。
長い休みには旅行、アルバイト、ボランティアなどを通して見聞を広めてください。

経営学部長
青木　亮
(あおき　まこと)

自分が夢中になれることを見つけてください。世界が広がります。また大変でも、自分の頭で考えて行動するように心がけましょう。
最後に、大学時代はいろいろな意味で自由が広がります。自由には責任が伴うことを自覚してもらえればと思います。

コミュニケーション学部長
柴内　康文
(しばない　やすふみ)

コミュニケーションのあり方の大きな変化が社会で進む現在は、まさにそれについて学び、理解を深める絶好のタイミングと思います。
ともに学び、また作りあげていくなかで大きく成長されることを心から願っています。

現代法学部長
羽貝　正美
(はがい　まさみ)

大学は自分を成長させるための学びの場であり時間です。自分を鍛え、社会に出ていくための準備の時間ともいえます。様々な学びと多くの出会いを通して社会への目を開き、自分自身の可能性を広げる豊かな4年間としてください。

全学共通教育センター長
新正　裕尚
(しんじょう　ひろなお)

18歳の頃を振り返るとああしておけばよかった、ということばかりで、皆さんにあれこれお説教をしてしまいそうです。でもそんな年寄りのお説教を聞くよりは、失敗を恐れず、自分で思うところをやってみてください。

図書館長
徐　京植
(そ　きょんしく)

新入生のみなさんが誇りにしてよいものの一つが本学の図書館です。建物もカッコイイのですが、もっと大切なことは蔵書の充実ぶり。大学生になってこれを活用しないのは惜しい。
いま本を読んでおくと、一生の宝になりますよ。

2018年度 新任教職員紹介

★主な担当科目（教員のみ）　◆趣味・特技　■東経大での抱負　※敬称略

経済学部

経済学科　専任講師
重田　雄樹
（しげた　ゆうき）

★証券市場論
◆瞑想
■教育・研究を通して、東京経済大学に貢献したいと思っております。

経済学科　特任講師
小林　かおる
（こばやし　かおる）

★英語コミュニケーション
◆演劇・映画・海外ドラマ、旅行、ピラティス
■母語が異なる人々が集う場におけるコミュニケーションに興味を持っています。授業では、学生の皆さんに英語を使う楽しさを体験していただけたらと願っています。

経済学科　専任講師
寺田　佳孝
（てらだ　よしたか）

★教育学、教育原理等教職課程科目
◆車での旅行、とくに温泉訪問
■ドイツの政治教育を手がかりに政治・経済・社会問題の教育方法、教育と社会の関係性を考えています。この課題について皆様の諸活動に学びつつ、より深く検討できれば幸いです。
どうぞよろしくお願い申し上げます。

国際経済学科　専任講師
李　海訓
（り　かいくん）

★食糧・資源問題
◆サッカー観戦
■学部1年生に戻ったような気持ちで、学生のみなさんと楽しく勉強したいと思います。

経済学科　特任講師
小林　海
（こばやし　かい）

★健康の科学、スポーツB
◆スポーツ観戦、ゴルフ、スキー
■運動・スポーツの良さを学生と共有できる環境づくりを実現できるように尽力します。

国際経済学科　客員教授
松本　充弘
（まつもと　みつひろ）

★多国籍企業の現状、英語経済セミナー、演習
◆仕事、飲み会、子育て
■本学を卒業してから約20年、教員として母校に帰ってきました。現職は米系飲料メーカーの日本法人代表ですが、教員としての目標は皆さんがワクワクする授業を行うこと。キャリア相談等もお気軽にお声掛けください。

経営学部

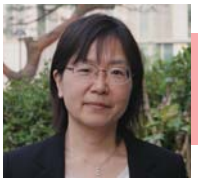
経営学科　教授
原口　恭彦
（はらぐち　やすひこ）

★経営管理論
◆街巡り、スポーツ観戦
■激しい社会変動に対抗できる教育・研究の実践を通じて、伝統ある本学の発展に寄与したいと考えております。

流通マーケティング学科　教授
小暮　厚之
（こぐれ　あつゆき）

★保険論、リスクマネジメント論、経営統計
◆ギター演奏
■教育・研究を通して、東経大の発展に少しでも寄与できれば幸いです。
学生の皆さんと一緒に学べることを楽しみにしています。

コミュニケーション学部



教授
山下　玲子
（やました　れいこ）

★メディアコミュニケーション基礎、
　コミュニケーション心理学、社会調査入門
◆野球観戦、漫画、スキー、ジグソーパズル
■札幌、川口、練馬と渡り歩き、約20年ぶりに多摩の地です。東経大コミュニケーション学部の先進的な取組にずっと憧れを抱いていました。その喜びを忘れずに、教育、研究、学務にしっかり励みます。

客員教授
安斎　利洋
（あんざい　としひろ）

★表現と批評「可能人類学～スペキュラティブ・ワークショップ」、メディア制作ワークショップ「野生のコンピューティング」、身体表現ワークショップ「アーティストと作るワークショップ」
◆料理を作りその写真を撮る歴18年、夢日記歴24年
■飛行機が発明される前、紙飛行機は紙ダーツと呼ばれていました。今この時代にも、将来別の名前に変わる紙ダーツがあるはずです。潜在的な紙飛行機を見つける力を、ともに培いたいと思います。

現代法学部

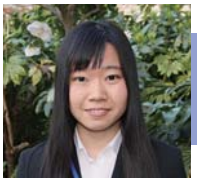
教授
田邉　真敏
（たなべ　まさとし）

★会社法、企業取引法
◆古い街並みの散策（国内・海外問わず）、乗り鉄。通訳案内士の資格を持っています。
■卒業後すぐには役に立たないかもしれない、でもきっといつか勉強しておいてよかったと思えることがあるような授業を目指します。
企業法務部門と大学でのデュアル・キャリアを生かした教育・研究に取り組みます。

准教授
高平　奇恵
（たかひら　きえ）

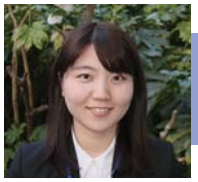
★刑事手続と法
◆歌、読書、料理
■「学ぶ」ことの楽しさを学生の皆さんと共有していきたいと思っています。
刑事手続、そして、この社会の在り方を一緒に考えていきましょう。

職　員



専任職員
廿樂　優香子
（つづら　ゆかこ）

◆小銭貯金　インコと遊ぶ
■私が東経大を好きになったように、"東経大で良かった"、"東経大が好き"と更に思ってもらえるよう、全力を尽くします。



専任職員
夏目　真衣
（まつめ　まい）

◆旅行
■2020年に創立120周年を迎える伝統ある母校を重んじながら、教学ビジョンに沿い、更なる発展に尽力すると共に、自分自身も進一層の気概を大切に成長したいと思います。よろしくお願いいたします。

一人ひとりその人らしく、より良い学生生活を送るためのプラスα
～開室50周年を迎えた学生相談室の役割～

大学での４年間の学生生活は、新しい出会いと驚きの発見に満ち満ちています。その一方で、学生のみなさんが大人への過渡期にさしかかって「不安」や「不満」の気持ちを抱くようなことにも少なからず直面することでしょう。新入生の方々はなおのこと戸惑いが多くあるのではないでしょうか。

東経大の学生相談室は、学業や進路をはじめプライベートな問題に至るまでさまざまな相談に対応するため、1967年5月に開室されました。以来、「カウンセリングは自らの力を高めるためのクリエイティブな協同作業である」として常に学生に寄り添い、2017年度には開室50周年を迎えました。

50年の歩みを振り返ると

大学における「学生相談」は戦後、アメリカから厚生補導（Student Personnel Services）の考え方が日本に導入されたところから始まりました。日本で初めての学生相談所が東京大学と山口大学に設置されたのが１９５３年のことですので、東経大の学生相談室も日本の大学の中では歴史ある相談室の一つと言えるでしょう。個性に応じた、きめ細かなサポートに力を入れてきた本学の手厚い学生支援の精神は50年間脈々と受け継がれて、学生相談室は現在も教学ビジョン「東経大チャレンジ２０２０」に示された「サポート・クオリティ」の担い手のひとつとなっています。

開室50周年記念講演会を開催

学生相談室では、２０１８年２月28日（水）に大倉喜八郎 進一層館（フォワードホール）で開室50周年を記念する講演会を開催しました。教育人間学の第一人者である京都大学大学院教育学研究科の西平直教授を講師に招聘し、教職員を含む１６３名の参加を得た講演会は、「ジェネレイショナル・サイクルとは何か－人生の法則と偶然－」と題して行われました。「今では先行世代に対するケアとして親の介護、将来世代に対するケアとして子育て、さらに自分自身のケアが必要な時代となっており、バランスのとり方が大切だ」との講師の指摘を受けた今回の講演も、日々の研鑽のひとつとして学生のみなさんと対応していく上で必ずや役立っていくはずです。

リニューアルされた学生相談室では

学生相談室は１号館２階。２０１５年のリニューアルで学生相談専用の６つの面接室と学生同士で情報交換できるサロン（談話室）が整いました。学生相談委員の教職員、臨床心理士、精神科医が安全で快適な面接室でさまざまな相談に応じており、もちろんプライバシーを守ることにも万全を期しています。２０１６年度の利用率は６・３％で、日本学生相談学会の全国調査による平均と比べて高い利用率となっていることは、東経大の学生相談室が利用しやすい環境を作り出しているからこそではないでしょうか。

学生相談室で待っています

学生相談と聞くと、一部の病気を患ったり、困った事態に陥ったりした学生のためのものと想像してしまうかもしれません。しかし、学生相談が担うのは「その人らしいより良い人生を送るためのプラスα」となること。カウンセリングは自らの力を高めるためのクリエイティブな協同作業なのです。

学生のみなさん一人ひとりのその人らしさ、そこにポジティブ志向を上乗せしていく協同作業にぜひ一緒に取り組んでいきましょう。

教員★リレーコラム　第3回

私の★研究

もはや産後ではない

コミュニケーション学部
准教授　松永　智子

赤ん坊に読み聞かせる、という体で、夢中になって絵本を読みまくっていた育休も佳境のある日。思いがけず、本コラム執筆のご指名を頂戴しました。育児にのめり込む一方、仕事を中断している後ろめたさはどんどん募る。再起動の好機かと、恥を承知でお引き受けすることにしました。というわけで、私の★研究。やり残している「宿題」の話をさせて下さい。博士論文を早く本にしなければ、という話（宣誓）です。

日本の英字新聞は、一体誰に向けて刊行されてきたのだろう。高校生の頃に教材としていたJapan Times（JT）が、明治三〇（一八九七）年に日本人の手になる初めての英字新聞として創刊されたと知ったのは、メディア史を志し、未開拓のテーマを必死に探していたときのことでした。政府の支援を受けたJTは、権力批判を理想とする既存の新聞研究では「御用紙」と看過されてきたのです。

実際にJTは、戦時中に政府のプロパガンダを担うのですが、始まりは、内地雑居を前にした異文化コミュニケーション対策のメディアでした。論説記事のみならず、日本語新聞の解説欄、求人広告、投書欄も充実していきます。日本語リテラシーのない外国人に、生活情報を提供し、日本人が英語を学ぶ場、相互にコミュニケーションを図る場とする。その大義名分はどのように実現され、挫折したのかをまとめました。素敵な編集者に巡り合って意気揚々と企画書を書き、指導教官に推薦書までもらって出版計画が立ったのに、筆の遅さゆえ未だ手を離れていません。師匠には「巧遅は拙速に如かず」と指導されてきたのに。

東経大に就職が決まって京都を出るとき、ある先生にこう言われました。「研究者として独り立ちするということは、自分の先生から自由になるということなんだ。ものの考え方から着眼、文体に至るまで、みんな指導教官の影響を恐ろしく受けている。先生が偉大であればあるほどね。師匠の縮小再生産に邁進する危険だってある。だから一度、自分の中の〝先生〟を抜く、という努力が若手には必要だと思うよ。まあ、十年はかかるだろうね」。

なるほどそうかと肝に命じてから、あっという間に四年の歳月が流れました。関西とは異なる東京の知的風土に刺激を受け、新しいことも始めてはみたけれど、「宿題」を提出しない限り、私は永遠に先生から自由にはなれない。子どもの寝息が砂時計の砂の音に聞こえてきて・・・「やばい！」と飛び起きる。私の産後景気は終わった。研究者生命の瀬戸際に立っているような、スリル満点の、春です。

次号は・・・経済学部専任講師
山辺　弦先生です。

職員★リレーコラム　第3回

私の★シゴト

総務部長
武末　直子

今からおよそ五年前、当時の事務局長に呼ばれ総務課長への就任を告げられた。青天の霹靂、かなりの驚きだった。中途採用で本学に就職して十九年のほとんどを、情報システム課で過ごしてきた。前職での知識・経験を活かしながら大学の情報化に貢献できる職場に自分としても満足していたし、勿論異動があり得ることは承知していたものの、何となく自分はこのままずっと、と勝手に思っていたので、正直本当にびっくりした。

その際、与えられたテーマが、新職員人事システムの構築だった。本学以外の職場の経験を持っていたこともあり、本学の職場環境に課題を感じていた部分はあった。組織として人を育てる仕組みや風土が希薄なこと、皆で目標を共有して前向きに頑張る推進力が弱いこと、そんなことはずっと感じていたので、新しい挑戦を始めようという思いで、総務課長に就任した。

就任したら、そんな思いは吹き飛んでしまうような慌ただしい毎日の連続だった。総務課の業務経験に乏しかったので、向き合うこと一つ一つ全てが勉強だった。それでも容赦なく目の前を膨大な書類が通過し、事故や苦情など様々な突発的案件が降りかかり、諸々の行事の波が流れてきた。課員、上司はじめ周囲の方々の協力、助言により、何とか毎日を凌いで来たというところだろうか。

総務部長になると、また一気に業務範囲が広がり、果たすべき役割も大きくなった。経理も管財も、専門的知識が求められる分野なのに、自分には足りないものが多すぎる。勉強し情報を集めながら、そして、周囲の方々の協力、助言のおかげで何とか毎日を凌いでいる状態は相変わらず。本来は、キャリアをきちんと積み上げて、その上で然るべき役割を担うべきであると思うものの、そんなことを言っている間もなく、明日の予定も山盛り状態である。

そんな中ではあるが、総務課長に就任した時に感じていた課題、「組織として人を育てる仕組み作り」、「皆で目標を共有して前向きに頑張れる環境作り」に向けて、一歩ずつでも前進していきたいと思っている。

新学期が始まり、新入生を迎え賑わうキャンパス。眩しい新緑が芽吹いている。あと何度、この景色を見ることができるだろうか、と思いながら、今、自分にできる最善を尽くしていきたいと思っている。

次号は・・・学務部長
小林　克己さんです。

学生コラム

『キャリアデザインプログラムで過ごした1年を振り返って』

島　尚希
経営学部2年

この1年は私にとって大変に貴重な時間になりました。それはとても濃い時間で、素晴らしい仲間に囲まれ、様々な経験を積むことができたからです。過ぎていく時間の流れがとても速かったことを考えると私の人生の中で最も充実した1年だったと思います。

キャリアデザインプログラムの1期生として入学した2017年4月、初めて出会う仲間に最初は戸惑いながらも50人という他学部に比べてもとても少ない人数だったこともあり、みんなすぐに打ち解けていきました。授業でも実践的な内容が多く、ひとつの課題について数人のグループで討論し、プレゼンをするということを毎週やってきました。最初は私も人前で話すのが苦手で、言いたい内容を聞いている人に伝えることがなかなか難しかったのですが、回数を重ねていくうちにだんだんと苦手意識が消えていきました。そして、5月末に開催された未来の働き方を考える「Google Womenwill」のワークショップをきっかけに働き方改革について意識するようになり、その後結成された働き方を考える学生団体「TKC Unlimited」に参加し、「働き方を考えるシンポジウム」を企画・開催しました。皆で協力し、企業で働く人と実際に交渉を重ねて一から立ち上げ、聴衆を集めて成功に導いたことはとても大きな経験になりました。

私は入学前から大学生のうちにいろいろな経験を通して成長をしたいと考えてきました。学生団体の一員として働き方について考えたり、国際協力について関心を持ち国際NGOの勉強をしたりしています。その他にも個人的に多く海外に行こうと考えていて、昨年12月にカンボジアとベトナム、今年の3月にはサイパンとタイに行きました。観光だけでなく、その国の雰囲気や人々の生活などを肌で感じることは、日本では経験できない体験だと思っていますので、これからもアジア、アメリカ、ヨーロッパなど学生のうちに多くの国に行きたいと考えています。

私は将来、人材育成にかかわる仕事がしたいと考えています。今、成長が著しい企業でも人材育成がしっかりできていないとその成長は一時的なものとなってしまいます。多くの企業が長期的に成長できるような人材を多く育てる手助けを将来的にできたらいいと考えています。そのためにキャリアについての勉強をしたり、大学主催のキャリア塾に参加して実際の新人研修に近いものを経験したりしました。今までは自分の将来の夢を聞かれても曖昧な答えしか返せなかったのですが、この1年、大学の授業はもちろん学生団体での活動など様々なことを経験していくうちに少しずつ私が将来何をしたいのかわかるようになってきました。もちろん残された大学3年間を過ごしていく中で変わっていくこともあると思います。学生のうちにたくさん考えて、いろいろな経験を積み重ねていければ私の人生に一番適した選択ができると信じています。そのためにも東京経済大学で過ごせるこの4年間を大切にしたいと思います。

留学生コラム

『日本への留学は父の影響から』

CHEW SHEI JIENG（チュウ セイジェン）
経済学部3年

日本に留学しようと考えたのは父の影響である。幼い頃、日本で勤務していた父が電話してくる度に、日本の伝統文化や面白い情報を教えてくれた。最も忘れられないことは父が無くした財布が戻ってきたことである。これには、日本人の道徳心が高いと強く感じた。また、震災に便乗した犯罪がなかったわけではないが、諸外国で見られるような略奪や暴動がなく、治安や秩序などの社会的安定は保たれていたこともある。このことにも、非常に感銘を受けた。母国のマレーシアでは一年間、大学に通ったが、広い視野と複眼的な価値観を持って世界を見られるようになることを目指し、日本へ留学することを決めた。それは、自分の人生に転機をもたらしたと思っている。

大学の生活について是非皆さんに紹介したいのは、異文化のゼミでネパールに行く海外研修に参加した経験である。多様な文化を持ち、精神的に豊かな上に無限の可能性があるはずのネパールが発展できないのはなぜなのかを検討することが研修の目的であった。二週間の海外研修を通じて、性差別こそがその国の発展を妨げる原因の一つであると気付くとともに、ネパールから見られた母国マレーシアとの違い、また日本との違いを比較しながら、それぞれの社会的秩序を経済の現状に当てはめて考えることができた。また、この研修によって一つ大切な発見をすることができた。それは、確かに専門知識の習得は大切だということである。習得した専門知識をどのように活かせば良いのかを考えながら、自分の潜在的な可能性を拡大するよう考える事こそ大学に入る本当の意味なのだということが分かったのである。

日本人のように仕事に忠実に対応する態度を身に付けたい私は、大学卒業後には日本で就職したいと考えている。留学生としては、社会人基礎力を育成するばかりでなく、周囲よりもいち早くマナーや話し方などの基礎知識を得ることがさらに大切だと思う。そこで、インターンシップに参加することを決めたが、インターンとしてうまく対応できるように、今はビジネス日本語を一生懸命に勉強している。BJTビジネス日本語能力テストも受ける予定だ。

国際的に活躍するための経験を積むためにも、日本の国際的企業に就職したいと考えている。東南アジア方面には日本企業が数多く進出しているため、何年後かには母国のマレーシアで日系企業か日本と関係の深い会社に転じたいとも思う。そして、日本とマレーシアの架け橋となり、母国における外国企業との取引や国の経済の活性化に貢献できればと思っている。

学生記者の視点

～日本における子どもの貧困率を見る～

大和 慎吾
経営学部４年

１３・９％。これは現在の日本の「子どもの貧困率」（17歳以下）を表した数値（平成28年 国民生活基礎調査）である。１３・９％という数字は、人数に例えると７人に１人の子どもが貧困状態にあるといえる。前回調査時の２０１２年での貧困率は１６・３％で過去最悪の数字であり、６人に１人の子どもが貧困状態であった。しかし、直近の２０１６年度調査で２・４ポイント減少し貧困率は改善したのである。

そもそも貧困というのは「絶対的貧困」と「相対的貧困」の２種類に定義され、日本での「子どもの貧困率」は相対的貧困のことを指す。イメージとして〝４人世帯の可処分所得が２５０万円未満〟くらいを想定すれば、子どもにおいては家庭の事情やひとり親世帯であるため塾に行けない、生活保護を受けているため経済的に高校や大学などへの進学を諦めてしまう、親が夜遅くまで働いているためひとりぼっちになってしまう、など貧困に悩んでいる子どもがたくさんいると考えられる。このような状況から２０１３年に「子どもの貧困対策法」が制定されて、ようやく日本が本格的に学習支援などの無料塾や子ども食堂、居場所づくりなど、改善に向けて動き出したのである。

これらの話を聞いて私は、先輩からの紹介もあり学習支援のボランティアを始めた。対象は中学生で、主に週１回ほど勉強を教えている。そこで関わる生徒を見ていると、普通の生徒と変わりなく勉強意欲も高く、進学を希望している生徒も多い。しかし経済的な理由で塾に行けずに学習支援を受けている現状を目の当たりにすると、貧困が原因で学習環境が整えられず十分な勉強時間が取れない子どもたちがいることは問題だと思う。これらの問題を解決するための近道は、例えば今ある奨学金制度の上に給付型奨学金を増やして支援をしたり、スクールソーシャルワーカーを活用して担任との連携を取り合い、地域の人などとのネットワークを大切にするなど、社会生活を支える仕組みをつくることも必要なのではないだろうか。そうすることで情報共有ができ、少しでも解決につながると思う。実際に学生時代に学んだことは社会に出た時に必ず役に立つことであり、働く上での能力になってくるため早いうちから対策を考えることが大切だ。

今現在、直ちに貧困問題をゼロにすることは難しいが、減らすことは可能なはずだ。これから先、貧困問題が少しでも改善していき、格差のない日本になることを願うばかりである。

学生記者募集！
（アルバイト）

・取材・原稿執筆、写真・動画撮影、動画制作に興味のある1・2年生
・経験不問

あなたから東経大の魅力を情報発信してください！！

詳しくは広報課（1号館1階）まで

大倉記念学芸振興会より

2018年度実施予定企画

詳細は順次、本学Webサイトでご紹介してまいります。

学術講演会

「国家と地図」

東京地学協会副会長・元国土地理院院長
講師　星埜　由尚 氏
開催日 2018 年 5 月 12 日（土）
2 号館 B301 教室

―講演概要―

地図は文字より古いと言われます。人類は太古の昔から地図を作成してきました。国家が形成されると、国家は、領土の明示、徴税、土木建設などのために様々な地図を作成します。わが国においても、律令国家の形成とともに国家の地図が作成され、江戸幕府の国絵図、伊能忠敬の全国測量、明治政府の近代地図などを経て、現在の国土地理院が作成する国家の地図に繋がっています。

このような地図作成の歴史と地図作成技術の変遷について国絵図、伊能図、近代の地形図などを例に採り説明します。国家・国民にとって地図がいかなるものか理解頂けるようにしたいと思います。

芸術公演

「佐野成宏テノールリサイタル」

テノール　佐野 成宏 氏
開催日　2018 年 6 月 9 日（土）
4 号館 D101 教室

学術講演会

「1900 年・英国ケンブリッジ ＜トリニティ・カレッジ＞の大倉喜七郎」

講師　元ケンブリッジ大学図書館日本部長　小山　騰　氏
コメンテーター　本学名誉教授　村上　勝彦 氏
開催日　2018 年 11 月 24 日（土）
大倉喜八郎 進一層館（フォワードホール）【予定】

芸術公演

「平家物語を聴く ～琵琶演奏会」（仮）

薩摩琵琶演奏家　須田　誠舟 氏
日本琵琶楽協会理事長
開催日　2018 年 10 月 20 日（土）
大倉喜八郎 進一層館（フォワードホール）【予定】

学術講演会

「考古学から社会を読み解く：過去・現在・未来」（仮）

世界考古学会議（WAC）会長・九州大学教授
講師　溝口　孝司 氏
開催日　2019 年 2 月 16 日（土）
2 号館 B301 教室【予定】

CLOSE UP

各分野で活躍した学生を表彰する「ＴＫＵ進一層賞」

～ 2018 年度の表彰式に立つチャンスは誰にでも～

本学学生の文筆活動、課外活動、資格取得、学外活動等の成果を広く表彰する「ＴＫＵ進一層賞」。かつては活動分野ごと別々の表彰制度であったものを、2009年度に「ＴＫＵ進一層表彰制度」として統一し、「学芸部門」、「資格取得部門」、「課外活動部門」のそれぞれを表彰してきました。2017年度には、近年とみに学外コンテストなどで華々しい成果を残しているゼミ活動に着目して、「課外活動部門」から「ゼミ学外活動部門」を独立させるとともに「ＴＫＵ進一層賞」と新たな名称が付けられました。

2018年3月7日（水）、「ＴＫＵ進一層賞」と名称が改まって初めてとなる表彰式では、「学芸部門」で４名、「資格取得部門」では主たる資格で45名、その他資格では545名、「課外活動分野」で5名と1団体、「ゼミ学外活動部門」では8つのゼミナールがそれぞれ表彰されました。

表彰対象となる活動成果の難易度によって表彰内容は異なりますが、注目すべきは表彰された学生の数ではないでしょうか。サークル単位やゼミ単位で表彰されている形があることも併せて考えれば、実に多くの学生がこの制度によって表彰されていることになります。

応募の時期はエントリーする「部門」によって違いがあるものの、表彰に結びつくのは活動の成果ですから、取り組み始めるのならば早いにこしたことはありません。年度初めの今こそスタートを切る絶好の機会です。対象が多岐にわたっている分、表彰される可能性は誰にでもあるということができそうです。

「一年の計は元旦にあり」ではありませんが、年度初めの一念発起で取り組んでいけば2018年度の「ＴＫＵ進一層賞」表彰式の場に立つ自分がいるかもしれません。

ぜひ挑戦してみてください。

東京経済大学

第 51 巻 ４月臨時号
2018 年 ４月発行・編集　東京経済大学広報課
〒185-8502　東京都国分寺市南町 1-7-34　TEL 042-328-7724
Ｗｅｂサイト http://www.tku.ac.jp